

2022年度自己評価結果公表シート

本園の教育目標

キリスト教信仰に基づき、幼児一人ひとりを大切に親と子の育ちの場となるよう努めるものとする。
(施設の目的及び運営方針)

第2条 この幼稚園は、幼稚園型認定こども園であって、「日本基督教団信仰告白」に言い表されたキリスト教信仰に基づき、学校教育法第22条及び第23条に基づき幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。

2 本園は、社会の期待や願いに応えられる創意と活力のある保育活動をすすめ、園児・保護者・地域に信頼されるよう努めるものとする。

3 本園は、安心・安定した情緒と落ち着いた保育環境の中で、健やかで豊かな心と体が育つよう保育を行うものとする。

4 本園は、子育て支援と対話・相談を大切にし、親と子の育ちの場となるよう努めるものとする。

神様の守りと導きの中で、共に生かされていることを感謝し、喜びと祈りを持って保育に携わる。

一人ひとりの見とりを丁寧に行い、興味や資質、友達関係、遊びの具体的な姿を保育者間で共有し、願いに基づいた保育計画をしっかりと立て実践し反省し見直していくことを常とする。“縦割り構成の自由保育”には高度な配慮と保育者の資質が求められるが、保育者自身も学び、自己研鑽を積み、成長する保育者集団として、子どもが主役の保育を創り出せるよう努める。

1. コロナ禍3年目の変化の中で

昨年度に引き続き【広い庭を活用した保育】【室内遊びの時の三密にならない工夫】【手に触れるものを一日に繰り返し消毒する消毒の徹底】【常時換気と意図的換気を組み合わせた換気の徹底】【手洗い・マスク・検温などご家庭にご協力をいただいた健康管理の徹底】【昼食時のパーテーションの利用・出来る範囲での黙食】等を丁寧に取り組みながら子どもたちの健康と安全が守れるように努めた。

幸いなことに、園内でのクラスターの発生は無かったが、県内市内での感染が拡大した時期には、感染者が複数名発生した。また、年間を通じ職員の罹患や濃厚接触者となり出勤できない事態があったが、休園や時短保育などにすることなく、保育をすることができた。

マスクの着用や昼食時の黙食については乳幼児であることから、無理強いはずし出来る範囲で行うことを常としていたが、年度途中より、国のコロナ対策の指針にも子どもの心身の発達を優先すると示されるようになり、園内でも、従来の外遊び時に加え室内遊びでもマスクを外す試みを徐々に重ねていった。

しばらくは、子どものマスクは外しても保育者のマスクは着用のままであったが、3学期には登園・降園の受け入れ時に保育者もマスクを外し、顔全部で子どもたちを迎える姿へと変えていった。

3月に室内で行われた「お別れ礼拝」や「お別れ会」では子どもも職員も全員がマスクを外し、お互いの表情を見あいながら豊かな時間を過ごすことができた。

2、 保育の充実にむけて

- ア、キリスト教の信仰を原点とし、毎朝、聖書を読み、聖書のメッセージを聞き祈りながら、園の根底である一人ひとりの存在を尊ぶ「キリスト教保育」への理解を深め保育にあたった。年間指導計画をもとに、月の主題・聖句・願いを決め、教師会で共有した。
- イ、縦割り自由保育においては、複数担任制で保育にあたった。
年齢や経験によらず、保育者自身がより主体的に子どもを見つめ関わり、そこで得た豊かな気づきを共有しながら計画をたて実践していくことを念頭に日々保育を積み重ねた。子ども一人ひとりの育ちについて“みとり”を共有し保育を考え合う週案会では、より主体的になった保育者から活発な意見が出され、個々の子どもの姿や保育の反省・次週への展望などを出し合いながら、週案を作成し、とても有効であった。
- ウ、「子どもは遊びの中で育つ」ことを大切に、本年も、子ども自身が遊びに出会い遊び込んでいく時間をできる限り確保し、一斉の活動などで遊びが一度中断したとしても、再び遊びが再開できることや今日の遊びの続きが明日も出来るということを可能な限り保障していく配慮を行った。子どもたち自身が意欲的に日常を送る一方で、保育者も子どもの興味や遊び方、成長への願いなどを加味して、刺激となる遊びの提案や環境を積極的に整えていくことを保育者間の共通理解として日々保育にあたった。
年間を通し、自己実現、自己肯定感の育ち、意見の衝突、他者の思いや存在を受け入れること、協働の遊びの姿など、幼児期に育つ大切さを謳われている非認知能力の育ちが豊かに育まれていることを感じた。
- エ、行事については、行事の願いや意味合いを理解し共有しながら、安全で豊かな経験が出来るように計画を立て実施した。年長児の夏期保育（お泊り保育）では、2年ぶりに園外に宿泊することを積極的に検討し下見なども重ねたが、コロナの勢いが強かったため、安全を最優先し園内での宿泊とした。内容的には、1日目2日目ともに自然を存分に体験できる外部施設に出掛けていく計画を立て、中身の濃い夏期保育になった。年間を通してすべての計画した行事を実施し、豊かな経験を積み重ねた。特に、3学期には3年ぶりに会食会を復活させ、子ども自身も調理の一過程を経験し、給食の先生方に仕上げていただく形で、コロナ禍前の誕生会のように全園児での会食会を実施することが出来た。
- オ、子どもの情操教育の一環として、バイオリンパフォーマーの牧美花さんによるコンサートを保育の中で開催した。音楽の世界に引き込まれ、心を弾ませる多くの子どもたちの姿があった。コロナ禍の中にあることに加え、生の音楽に触れる機会の少ない年齢の子どもたちにとって、貴重な体験となり、また、コンサート終了後すぐに牧さんの演奏の様子を絵に描き始める子どももいて、子どもたちの受けた感動や喜びが大きかったことを物語っていた。
また、母の会有志（親子読書クラブ）による絵本の読み聞かせを年に2回行った。母たちの創意工夫した読み聞かせはとても楽しく、絵本の世界を身近に感じる嬉しい時となった。
- カ、年々利用が増えている預かり保育の時間帯については、長時間の保育時間になる子どもも多いことから、より家庭的な保育を預かりの時間に提供できるように配慮した。本年は、預かりの担当は、日替わりのシフト制ではなく、日中の子どもの様子も把握している保育者が専任として毎日入ったことにより、継続的な関わりが出来、楽しい夕方の時間を過ごせた。

キ、2歳児教育・保育（クローバーの部屋）では、個人差が大きく、育ちの葛藤をくぐり抜けて自立の芽生えが育つ成長過程の子ども一人ひとりに対してより添った丁寧な保育が行われた。

教育（認定外こどもと満3歳になった1号こども）と保育（3号認定こども）合わせて27名という過去最多の保育人数となったが、第5保育室・第6保育室と隣の第4保育室、3部屋を使って、広くなった保育室をパーティションなどで必要に応じて空間を分け、多様な子どもたちの成長に対応する保育を心掛けた。幼児ぐみ同様に複数担任制を導入したことから、保育者間での子ども理解もより深まり、結果、豊かな保育につながった。

積極的に毎日戸外に出る活動をする、手指を動かす製作活動・リズム感や一体感・情緒が育まれる表現活動など歴代のクローバーで培ってきた2歳児教育の活動をバランスよく取り入れ、子ども一人ひとりの自己肯定感・友だちと一緒に心地よさの体感・遊ぶ力の育成に努め、豊かな成長の場となった。

ク、ブログの発信は基本的に毎日行い、子どもたちの遊びの様子とともに園の子ども観・保育観を発信する手立てとなった。同様に、園だよりやクラスだよりでも子どもの育ちあう姿を発信した。

ケ、外部機関との連携

子どもの育ちを多角的に援助するため、様々な教育機関や医療機関や事業所等との連絡を密にして、共有し、保育に生かせるよう支援会議などに積極的に参加した。

また、3学期には、卒園を控えた年長児が、社会見学として、近くの小学校に学校探検に行くなど、地域の小学校との連携も大切にしたい試みも行い、有意義な時間となった。

コ、5月に保護者会を開催し、園の保育の基本方針や園のコロナ対策についての説明を行った。8月には、次年度に改定する給食費・おやつ代についての説明会を開催し、同意書の提出をもって同意を得た。3月には園長交代の説明会を開いた。保護者への通常の連絡はお知らせの配布、緊急時の一斉メールの配信などで行った。

一年間通して保護者からの理解と信頼をいただき、保育に勤しむことができ感謝である。

3. 園の施設、設備、遊具と安全について

ア、トイレ・園庭フェンスなど施設整備の大きな改正計画を立て準備を進めていたが、諸事情により、今年度は実施が出来なかった。次年度以降の課題としていきたい。

一方、県外での通園バスの置き去り事案を受け、バスの安全装置の設置を年度末に行った。

イ、園舎新築以来、使用してきた2階屋上のプールは木枠が劣化したため、年度末に解体した。次年度は別物を購入予定である。

ウ、子どもの居場所木質空間プロジェクトを2年ぶりに活用して、木製玩具“ズレンガ”を500ピース購入した。県材の木の香りや感触を味わいながら、友だちと考えを出し合い工夫し合って創造力ゆたかに遊ぶ姿が見られた。

エ、火災による避難訓練だけではなく、大規模地震を想定した訓練も行った。

また、大災害を想定し、保護者に迎えに来ていただく“引き取り訓練”を今年も行った。今年も、2階からの避難や予告なしの訓練など、様々な場面を想定し訓練を行った。

また、消防士の指導のもと、消火訓練も行った。

4. 子育て支援、家庭支援体制

子育て支援として行っている「こひつじ広場」は、コロナ禍ではあったが一年通じて開催が出来、影響もあり開催できない月もあったが、好評を得て、今年度も参加者が大変多い一年であった。今年度も教育的効果を考えて満1歳～2歳、2歳～就園前と2グループに分けて内容を計画して保育を行い、また、例年参加者が殺到する活動については、人数を決め予約制として、密にならない活動が出来るように配慮をした。1～3歳まで参加出来る「園開放」は、年に2回、楽しいテーマを掲げ開催した。

5. 保育者の質の向上、園内研修の充実へ

ア、他県で起きたバスの事故や教師による虐待事案などを重く受け止め、園内研修を重ねた。大切なお子様の命を預かる身として、一つの不適切な行動が子どもの心と身体を傷つけてしまうこと、また、チーム保育であるからこそ、他の保育者の気付きや行動によって最悪な事態は避けられるということを一人生の保育者が自覚する園内研修の時となった。

イ、“自分の部屋のこどもだけ”“目の前にいる子どもだけ”見ているのではなく、全体を見通す力をつけていこうということ、全員で全員の子どもをみるということは、誰かにやってもらうのではなく、どの子どもに対しても一人ひとりの保育者が責任をもってしっかり関わるということで、自分が行動する、気付いたら発信する、自分が出来ない状況にあるならば、同僚に的確な説明をして託す、誰にでもわかる明確な言葉を用いて「報連相」をすることを共有し合った。

ウ、園内で起きた怪我やヒヤリハットなどについても、報告し合うだけでなく、なぜ起きたのか、何が足りなかったのか、どうすれば次は防げるのか等沢山考えて話し合う時間をとった。この研修をしてから、子どもの姿の見とり・行動の予測により心に向けようとする保育者が増え、その結果、安全面はもちろんのこと、子どもの今を捉えた環境や経験を準備していく保育へと繋がっていった。

エ、虐待については、行政より勧められたセルフチェックシートを用いて、あえて少人数でのグループ研修を試みた。

虐待そのものの事案はなかったが、日ごろの保育の中で抱えている悩みや心配をお互いに知り合うことになり、シフトや多様な業務で必要最低限のコミュニケーションになりがちな日常を反省し、保育者同士が打ち解けあい心と言葉を通い合やすことの大切さを感じる研修となった。参加型の研修を工夫していくことで保育の質もモチベーションも上がると感じたので、次年度以降も、時間を作り保育者が主体的になれる園内研修を重ねていきたい。

オ、多くの保育者がキャリアアップ研修を中心とした各種研修に参加し学び、教師会で内容の理解・共有に努めた。